「私の『戦後 70 年談話』 2」　　2025 年 12 月 02 日_

哲学者の梅原猛氏は、〈自衛隊というのは大変よい名称であると思う。攻めてきた他国に対しては死力を尽くして戦うが、決して他国に攻め入らない。それは日本の伝統に沿った軍隊であり、またカントが提唱した永久平和の理念にも合致する。私は、日本国憲法は外から与えられたものではなく、日本のこのような伝統に沿ったものであると思う。現在の安倍政権の政策がそのような伝統の精神を脅かすものではないかと私は憂慮しているのである〉**と書いている。自衛のための軍備は認め、他国を攻めない自衛隊はカントの永久平和論と合致すると言う。安倍政権の政策に対しては批判している。10 年前は「敵基地攻撃能力」などの政策はなかったが、現在は「新しい戦前」と言われるほどになっている。**

香川京子氏は、映画『ひめゆりの塔』に出演した女優である。子どもの頃、学校で引率されて、観に行き、あまりの残酷さに弁当を食べられなかった記憶がある。彼女は戦争に関する映画や舞台を経験し、戦争問題に深くコミットしていき、〈戦争というのは、戦争が終わったからそれで終わり、というわけにはいかないのです。何十年も引きずっていかなければなりません〉**と書いている。広島での原爆死亡者は 14 万人と言われているが、原爆慰霊碑に納められた死亡者は 35 万人近い。原爆症で殺され続けている訳である。また、戦争の残虐な出来事に遭い、トラウマを抱え、アルコール依存症や家庭内暴力が納まらない人は多い。彼女が言う通り、戦争被害は、後々まで尾を引くのである。**

女優の奈良岡朋子はまず、〈生き残りの十字架が私にはある。爆撃も受けたし、機銃掃射も受けたし、死んで当たり前という状況でした。ただ運が良かったとしか言えません〉**と書いて、**〈人間は生まれてから死ぬまで生きるということを、天に任せればいい。われわれには生きる権利があるのです。なぜ人間が人間を力で淘汰するのか。民の生活を守ると口先で言っても、詭弁にすぎません。全然信用できません〉**と手厳しい。殺人事件があると、懸命に犯人を追い、大々的に報道する。命が失われたのだから当然である。戦争は、桁外れの死者を生み出す。これを阻止するために最大のエネルギーを注入すべきではないか。**

通称「731 部隊」と言われる「細菌戦部隊」を明らかにした『悪魔の飽食』を著した森村誠一氏は、〈すでに政権丸投げの前科のある元権力者（安倍晋三氏）は信用できない。まず人事からして内閣法制局、NHK、日銀等、すべて自分と同腹の者を集め、茶坊主を側近とする私的懇談会に囲まれて、永久不戦を誓った日本を、再び戦争可能国家に変えるための解釈改憲によって、戦争から学び得た平和の支柱 9 条を揺さぶってきた〉**と書いている。10 年前から、憲法 9 条の空洞化を目論む安倍政権の危険性を指摘している。国民の反対を押して、戦争のできる安保法制を法整備し、「敵基地攻撃能力」まで整え、沖縄諸島はじめ、日本列島は軍事基地化している。平和国家日本はどこへ行ったのか。**

脚本家のジェームス三木氏は〈戦争を起こすのは国家ではない。国家になりすました「時の政府」である。権力を維持するために、国民に被害者意識を植え付け、マインドコントロールして外敵をつくる。場合によっては国民に銃口を向ける。もうひとつ、戦争の本当の意味は、大量に人を殺すことである。武器は人を殺す道具であり、軍事演習は人を殺す訓練である〉**と言う。その通りで、人殺しの戦争を止めさせるために、時の政府の権力を監視することが何より大事である。ジャーナリズムは監視の使命を果たすことを怠るな！また、**〈はっきりいっておくが、核兵器を廃絶できない人類は、やがて滅亡する。国家間の戦争なんか、やれるはずがないのに、軍事力を強化して何の意味がある〉**と書いている。核廃絶の道筋は全く見えてこない。そして、国家間の戦争も止むことがない。**